

和服リフォームにおけるデザインおよび 縫製技術上の提案

今 井 裕 子

Proposal for Design and Sewing Techniques to Reform Japanese-style Clothes

Yuuko IMAI

Key words : 和服 Japanese clothes, リフォーム reform, 絵羽模様 ebamoyou, 耳ぐけ mimiguke

はじめに

第6回卒業制作ファッションショーにおいて、教師賛助作品としてガウンとワンピースドレスのアンサンブル「風花」を出品した。この作品は、母が衣類整理の過程で、手元にある未使用和服地の処遇に困り、私に対処を依頼してきたことが発端で誕生したものである。

現在、和服のリフォーム¹⁻⁵⁾の主流は、まず縫製箇所を全て解いて型紙を配置するため、和服生地幅である並幅36cmに制約されたデザインの洋服が多く、「リフォーム」ということで和服から全く形の異なる洋服に変身する妙を見せるものが多い。著者も依頼された当初は、スーツやコート、ワンピースといった通常行われている洋服1着へのリフォームを考えていた。しかし、対象の和服地は絵羽付けの肩裾模様の訪問着用であり、各部分に裁断され、しつけ糸で仮仕立てがされていた。裾模様や付下げなどの訪問着は、製作された当初はかなり高価であったものが多い。織り密度や色つけや刺繍など各工程に手間をかけられたものが多く、その模様の全体に価値があると考えられる。

そこで今回は、和服から洋服へのリフォームの試みとして、和服の絵羽模様の連続性を活かすデザインを考案し、「ガウン」を製作した。

さらに、「ガウン」だけでは着装する機会が少ないと考えられるので、ガウン地の色や絵羽模様を引き立てるドレスをデザインし、アンサンブルとして製作した。

特に、和服リフォームのために工夫した、ガウンデザイン、被服構成上および縫製技術上の提案をする。

方 法

1. デザイン上の工夫

リフォーム対象である和服について、絵羽模様全体を活かすために、前後身頃と衿を一繋がりそのまま利用できる洋服として、ガウンをデザインすることにした。

和服の軽やかなイメージから、絵羽模様の花柄が風にたなびき花吹雪のようになれば華やかで綺麗だろうと、作品のテーマは、「風花」と決めた。

次に、ガウンとアンサンブルで着装するドレスのデザインを検討した。

今回はガウンの華やかさを考慮して、セレモニーやパーティなど晴れの場面に着装するパーティドレスを想定し、ハイ・ウエストのワンショルダーワンピースに決定した。ドレスの生地は、和服地ガウンの地色や模様には負けない素材として、スパークサテンを選定した。そのスパークサテンがしっかりとしているので、ガウンと調和をし、さらに軽やかさが増すようにシフォンのオーバースカートをつけた。

2. ガウンの被服構成上の工夫

和服のリフォーム方法として、縫製箇所を部分的に解いた後、接合箇所を移動させる方法を提案する。今回リフォームした和服は仮仕立てのものであったが、縫製された和服にも応用可能である。

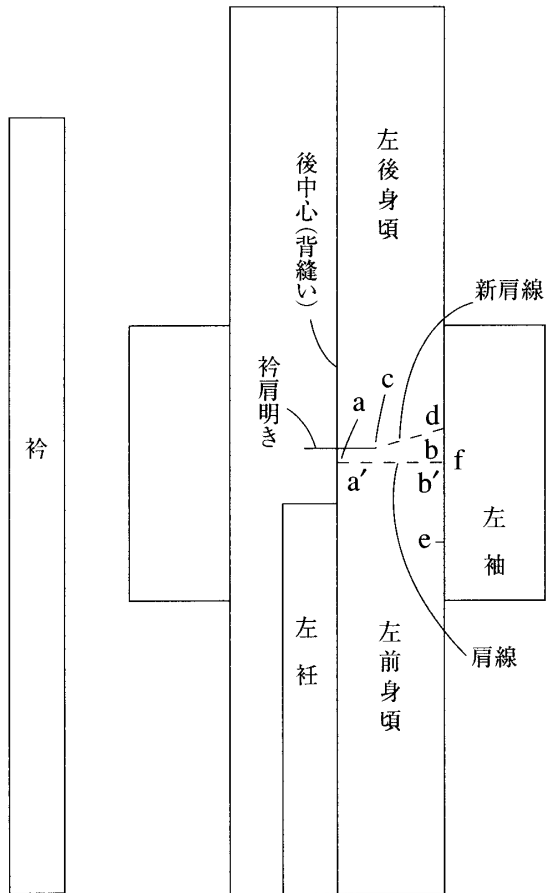


図1 略図

- ① 袖と衿は、しつけを解き、身頃から離れた。その略図を図1に示した。
- ② 背縫い、脇縫いおよび衿付けは、和服の縫い合わせ場所にしながら、柄合わせをし、縫い合わせた。
- ③ 和服では、前後の身頃は一繋がりであるが、ガウンとして人間の体を意識した立体に仕上げるため、肩線(図1の直線a~b)を切断した。
- ④ 背縫いを人台の背中心にあわせ、人台の肩線にあたる後身頃の場所を新肩線(直線c~d)とした。
- ⑤ 後身頃の新肩線から裁断線(直線a~b)までを人台の肩傾斜に沿わせて、人台の肩から前身頃側に廻した。
- ⑥ トレーンを曳くような裾回りとなるように人台の上で模索した結果、図2のように後身頃の元の肩線(直線a~b)と前身頃の袖付け線(直線b'~e)を縫い合わせた。これにより、平面的な構成であった和服にダーツを入れることなく、フレアーが入り、期待通りの裾回りが実現できた。

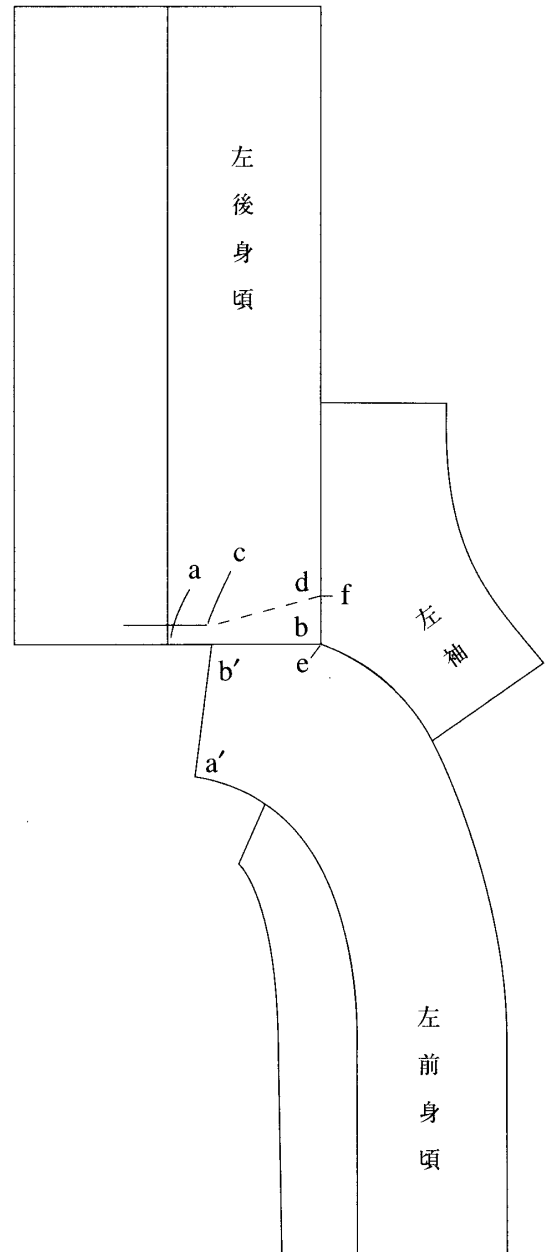


図2 縫い合わせイメージ図

- ⑦ 袖の形は四角のままで袖底の袋縫いをし、新肩山dに袖山fを合わせ、袖山の前後10cmを縫い合わせた。
- ⑧ ⑥での操作により前身頃と衿の従来の衿付け線が利用できなくなったため、人台の上で立体裁断の手法を用い、写真1右上のラインのように衿に深く入り込む新たな衿付け線を作成した。これにより、ダーツを入れることなく胸ぐせを解消することが出来た。



写真1 絵羽模様図 (身頃上部衿まわり部分は、一部略)
——：リフォーム前の和服線 (右身頃)

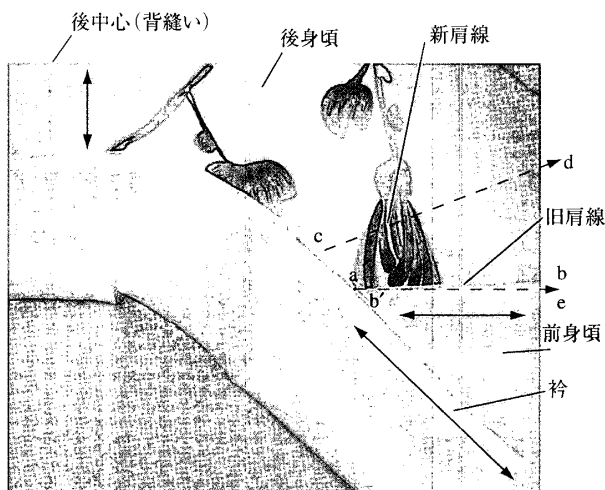


写真2 衿肩まわり (表)
↔：布目線

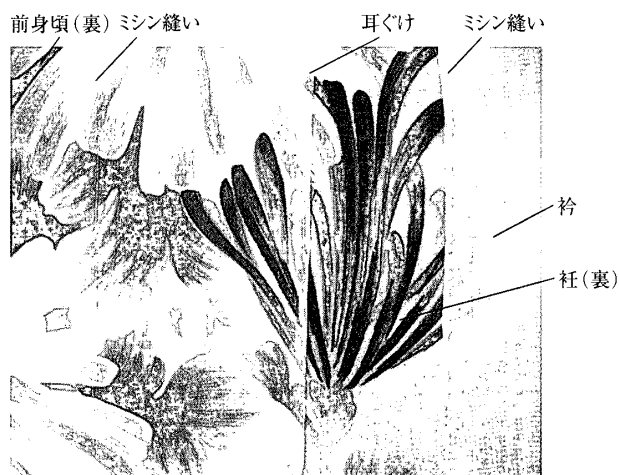


写真3 左身頃(裏)の一部

3. ガウン縫製技術上の工夫

洋服を製作する場合は、洋裁の縫製技術のみを使うのが通常である。しかし、和服を洋服にリフォームする場合、特に今回のように、部分的な解きにとどめる場合は、和服の縫製技術を併用することによって、デザインが活かされると考える。

① 脇と衿付けの縫代は「耳ぐけ」(写真3)で、裏

布を付けなくても縫代が落ち着くようにした。

② 裾の始末では、和服は曲線を使わず一直線の三つ折りくけとなるが、曳き裾のようなドレス風ガウンにしたため、人台にガウンをのせたまま写真1の右下のように裄先をカットし裾のラインを曲線とした。裾の縫代は和服の裾と同じく1cm幅の三つ折とした。

③ 衿は、共衿を作るための裁断はされておらず、

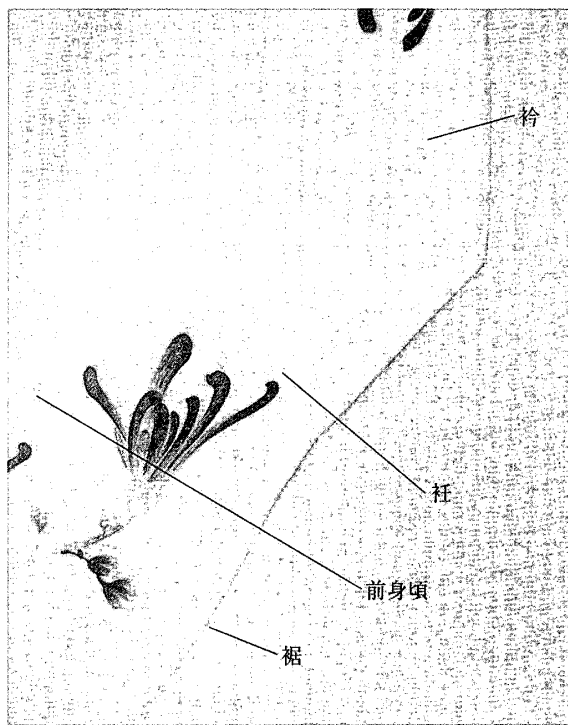


写真4 右前裾(表)の一部

長いままだったので「通し衿」とした。その衿先は一般の和服では四角く形付けられるが、今回のガウンでは四角にこだわらず、衿から裾にかけ流れるようなラインを表現し(写真4)、ガウンを完成させた。(写真5, 写真6)

4. ワンピースドレスの製作方法

① 着装対象者サイズの原型からチュニック丈のワンピースパターンを作成した。これをもとにフルパターンを組み立て、人台にのせ、デザイン線を決定し、ハイ・ウエストのワンショルダーワンピースの型紙を完成させた。

オーバースカートは立体裁断の技法を用い、型紙は特に作成していない。

② ワンピースの表地は、スパークサテンを使用し、接着芯ではりをを持たせた。

③ ハイ・ウエストの切り替えからシフォンでオーバースカートを付けた。和服の裾の直線裁ちをイメージしてオーバースカートの裾をスクエアにした。

④ 裏地には表地と同じ素材と型紙を使ってドレスを完成させた(写真7, 写真8)。

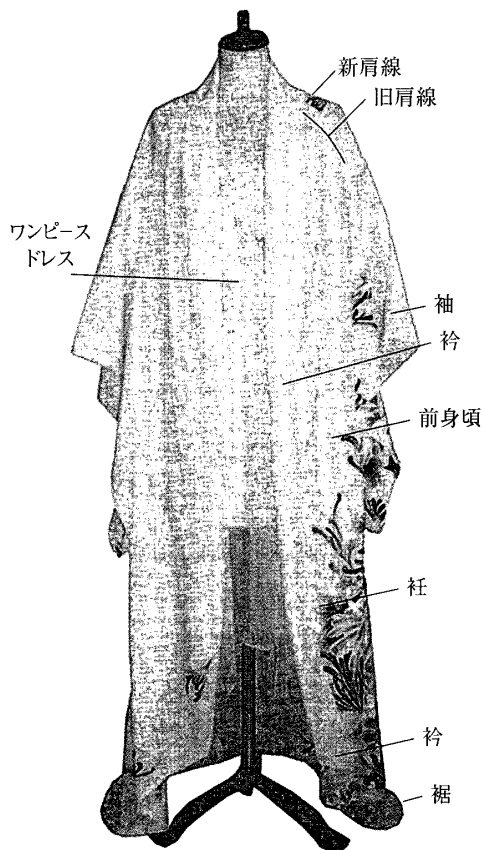


写真5 完成作品(前面)

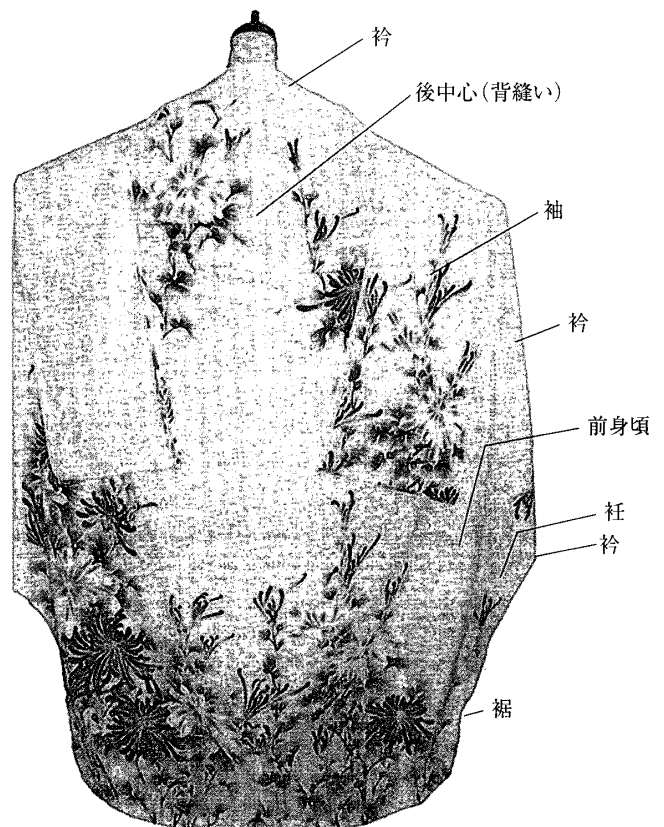


写真6 完成作品(背面)

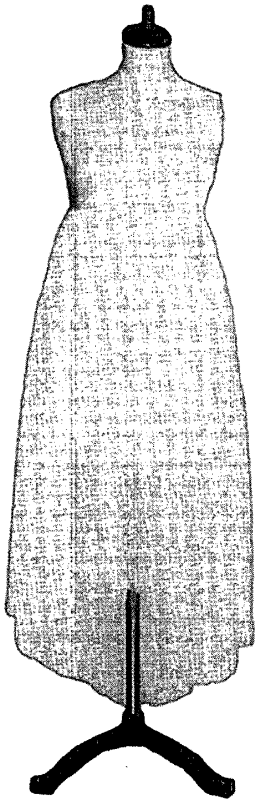


写真7 ワンピースドレス（前面）

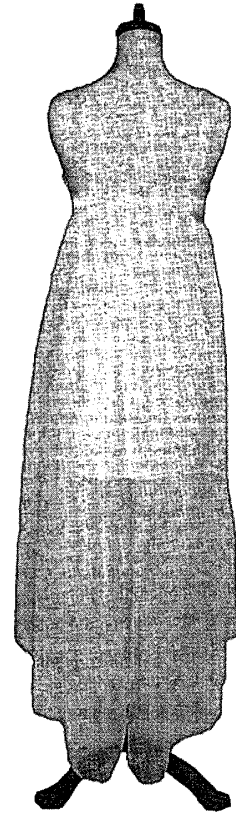


写真8 ワンピースドレス（背面）

結果と考察

平成17年2月6日（日）第6回卒業制作ファッションショーにおいて、教師賛助作品としてガウンとワンピースドレスのアンサンブル「風花」を出品した。その様子は、写真の通りであった。（写真9、写真10、写真11）

ガウンは、急ぎ足のようにスピードを出さなくてもゆっくりとした歩く速さで、写真10のように軽やかに風にのってひらめいた。これは、ガウンを一重仕立てとして裏地を付けない分、軽くなったためである。さらに、後身頃肩線と前身頃袖付け線を接合することによって裾に入れたフレアも、ガウンをひらめかせる効果を引き出したと考える。

一方、裏地を付けていないために、ガウンがひらめくと内側の縫代が見えることになった。しかし、縫い代の始末として、和服仕立ての技術である耳ぐけを導入することによって、ミシンで身頃に縫いつけたような堅さは無くなり、縫代のない1枚の布のような柔らかい効果が出せたといえる。

また、絵羽付け模様の全体は、和服の状態では着装

時に見ることができないが、ガウンにリフォームしたことによって、写真11の後ろ姿のように、一幅の絵のように見ることができた。

このように、和服の生地幅である並幅にとらわれずに洋服をデザインしたことや、和服の単衣仕立ての技術をガウンに導入したことにより、好評を得ることができたと考える。また、テーマの「風花」のように、風にのり舞っている花の雰囲気が出たと思う。

まとめ

和服の模様を活かした洋服にリフォームする工夫として、以下のようなことが提案できた。

1. リフォームデザイン
 - ・和服の絵羽模様の連続性を、洋服の‘ガウン’に活かすデザインを考案した。
 - ・着用場面を想定して、ガウンとアンサンブルで着用できるワンピースをデザインした。
2. 構成
 - ・人体の肩傾斜に合わせ、和服の肩線を後身頃側に移動させた。
 - ・和服の後身頃の肩線と前身頃袖付け線を縫合する



写真9 発表作品（前面）



写真10 発表作品（側面）



写真11 発表作品（背面）

着用者：山根加奈代

ことにより、裾にフレアーを入れることが可能となった。

3. 縫製技術

・縫製箇所によって、最も適切な洋裁と和裁の縫製技術を併用した。

(参考) 和服を洋服にリフォームする場合は、縫製箇所によって、和服に使用されていた縫製技術を適用する方が良い。

参 考 文 献

- 1) 株式会社ブティック社：和服をすてきにリフォーム，(2002) 株式会社ブティック社，東京
- 2) 岡あつ子：着物のリフォーム，(2003) 株式会社ブティック社，東京
- 3) 株式会社ブティック社：和服のリフォーム no. 5，(2003) 株式会社ブティック社，東京
- 4) 株式会社ブティック社：きものリメイク，(2003) 株式会社ブティック社，東京
- 5) 株式会社ブティック社：なおみコレクション 古布柄で作る服&小物，(2003) 株式会社ブティック社，東京

Summary

It is proposed that the three ideas from the view points of clothes making method are able to reform Japanese-style clothes to Western-style clothes with the best use of Japanese-style clothes, kimono's figure as follows.

1. Reform design

Ebamoyou, kimono's dynamic and continuity of figure and color were applied for the Western-style clothe, gown.

For increasing occasion to wear the clothe, the one-piece dress in ensemble with the gown was designed.

2. Composition of clothing

Shoulder line was moved to backside to suit the body shoulder slant.

Jointing of back shoulder line and front arm line of the kimono made it possible to let the fleir around hem.

3. Sewing technique

The most appropriate sewing techniques of Japanese-style clothes and Western-style clothes were applied for the Kimono's reform.